

2022年4月24日 主日礼拝

説教題「リコンストラクション」エフェソの信徒への手紙 2 章 14～22 節

主任牧師 加藤 誠

「実にキリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し…双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」(エフェソ2章14～15節)

受難週の一週間、朝と夕に礼拝堂を開放し、自由に祈りの時間を持っていたけるようにしました。わたしも朝、ピアノ側の前の席で聖書を開いたり祈ったりする時間を持ちながら、その間に何人かの方が祈りに来られる足音を聞いていました（基本的に目をつぶっていたので、足音の主の姿は見えていません）。気づいたのは「一人ひとりの足音って違うのだ」ということ。元気に階段を上ってくる足音、そっと静かに入ってくる足音、足を引きずるように歩く足音など。みんな違うのです。

イースターの朝、ある方がこの数日間、御自分が抱えている不安や恐れを語ってくださいました。そしてその方が受難週の間、そういう不安と恐れを抱えながら礼拝堂に来られた時の足音がそこに含まれていたことを知らされたのです。

また別の方は（その方は遠くにお住まいなので、受難週の祈禱会には出席されていませんが）、「今、自分には信仰がないのではないかと思わされている。だから、いつも祈りの最初に『どうか信仰を与えてください』と祈ることから始めている」と語られていました。私たちは「いつも神さまの恵みが実感できているから！」礼拝堂に集うわけではない。私たちの側の信仰は不確かなもので、神さまを身近に感じられる時もあるけれど、「神さまの恵みが感じられず、神さまが分からない」という時も多い。けれども、そういう信仰の不確かな、いったい自分に信仰があるのかどうか分からなくなっている者たちの真ん中に、十字架の釘跡の主が立ってくださり、「あなたがたに平和！」と宣言されるのです。復活の主は十字架の主です。十字架の釘跡がきれいになくなった主ではありません。十字架の釘跡、叫び、祈り、そのままの主が「このわたしと共に平和はある。わたしが生きているから、あなたがたも生きる。わたしの平和を受け取り、この世界に出かけていきなさい」（ヨハネ 20：19 以下）と教会の真ん中に、「かなめ石」として立っておられるのです。

教会はイエス・キリストを信じイエス・キリストを従う者たちの群れです。けれどもその信仰は、例えば腕時計のように一度身に着けたら外すまでそこにあるという自明のものではありません。いつも不確かで、神さまが見えず、神さまの声が聞こえていない時の方がずっと多い者たちの群れです。だから毎週、復活の主が死の固い殻を破って永遠の命をあらわしてくださった主の日に、礼拝に共に集い合い、聖書を開き、「神さま、この不信仰なわたしを憐れみ、信仰を注いでください」とひれ伏り、祈りを合わせる礼拝を必要としているのではないのでしょうか。そしてその私たちの真ん中で「平和」を宣言してくださる主イエスの語り掛けに共に聴き、

十字架の主の平和を受け取り、この場所から新しい一週間に遣わされていくのです。

今日の午後には 2022 年度の定期総会 I が開かれますが、先日の執行委員会で話し合われた「リコンストラクション（再構築）～希望は欺かない」というテーマと聖句、第一コリント 3 章 9 節「わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです」が提案される予定です。そのテーマに「礼拝堂が新しく建て直されたけれど、わたしたちもまた新しく建て直されていきたい」という祈りを感じました。新しい礼拝堂をいただく喜びのプロセスの一方で、さまざまな痛みと傷を経験した私たちでもありました。けれども、その痛みと傷を通して私たちに新しい命を注いでくださる十字架の主に希望をいただいきたいのです。そして、一人ひとりが聖書と向かい合う中で、「変わるように促されているもの」と「変えてはいけないもの」を考えながら、「新しく建て直される方向」を共に語り合っていくことができたらと願います。

その時に、わたし自身が「新しく建て直される方向」として聖書から聴くのは「キリストの平和」にあずかり、「キリストの平和」を、その働きと組織のあり様であらわしていく教会です。先ほどの復活の主の宣言でも、また今朝ご一緒に開いたエフェソ 2 章の言葉でも、「キリストがその十字架を通してあらわされた平和」への招きと使命が明確に示されています。弟子たちは復活の主から「平和」を受け取り、この世界の中で「平和」を分かち合う使命を与えられました。この「キリストの平和」は具体的には「隔ての壁」を崩していく働きです。

私たちの社会にはさまざまな「隔ての壁」（壁のこちらと向こうとの間に敵意を生み出す壁）があります。日本人と外国人を差別する隔ての壁、肌の色や生まれ、学歴や収入による隔ての壁、男と女の間にある隔ての壁、性的少数者に対する隔ての壁など。その隔ての壁は、教会の中にも、私たちの心の中にもある。「教会は大丈夫」ということはありません。教会だからこそ「遅れている感覚」があることを常に覚えたいと思います。

教会は、「隔ての壁」を打ち壊し、そこに生まれる敵意を十字架によって滅ぼして、平和を宣言される主イエスを「かなめ石」としていただいている群れです。それゆえ、自分の中にある「隔ての壁」に気づかされることに少しでも敏感であり、主イエスによって崩されることに謙虚である私たちでありたいです。そして、いろいろな人たちが隔ての壁によって傷ついた心と体、痛みを伴った祈りを、そのまま神さまの前に携えて集える礼拝でありたい。そして礼拝を通して「自分も大切なひとりとして、この共同体に招かれている」ことを受け取り、すべての人が神賛美に導かれる教会。非常に感覚的な表現になりますが、「キリストの平和」を「かなめ石」にした「やわらかさ」「しなやかさ」「あたたかさ」が感じられる教会として、共にリコンストラクション（再構築）に導かれていきたいのです。